

やはり俺がもう一つの現実で戦うのはまちがっている。

辻谷戒斗

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

京都への修学旅行が目前に迫った11月6日の日曜日。この日に、世界初のVRMMORPGである《ソードアート・オンライン》、通称SAOの正式サービスが開始される。彼、比企谷八幡はSAOのベータテスターであり、正式サービスが始まることを心待ちにしていた。しかし、いざログインしてみると、ログアウト不可でゲームの中で死んだら現実世界でも死んでしまうデスゲームだと言うではないか。そんなデスゲームの中で、彼は何を学び、何を成し、どう生きるのか――。

*この作品は『やはり俺の青春ラブコメはまちがっている。』と『ソードアート・オンライン』のクロスオーバー作品です。

*HACHIMANにするつもりはありません。

*ヒロインはアスナの予定です。

*二次創作作品はこの作品が初めてなので至らぬところもあると思いますがよろしく願います。

*この作品はpixivでも連載しています。

目次

やはりSAOがデスゲームなのはまちがっている。

第一話	リンク・スタート	1
第二話	もう一つの現実	7
第三話	閃光との出会い	19
第四話	彼と彼女の意志	24
第五話	第一層フロアボス攻略会議	32
第六話	訓練と酒場での対話	43

やはりSAOがデスゲームなのはまちがっている。

第一話 リンク・スタート

「もう1週間後には修学旅行っしょ!? テンション上がるわ〜!」

「だな」

「それな」

11月に入って、修学旅行が約1週間後に迫った今日。その放課後の我がクラスは、いつも以上に騒がしくなっていた。

え？俺？いつも通り机に突っ伏していますか？

だが、まあ、かく言う俺も柄にもなくテンションが上がってしまった。

しかし、その理由は修学旅行なんかでは断じてない。

今日から2日後、11月6日の日曜日。この日に、世界初のVRMMORPGである《ソードアート・オンライン》、通称SAOの正式サービスが開始されるからだ。

もう一度あの世界へ——今の俺の頭の中はその言葉しかない。戸部の依頼のことなんて忘れたね。もう。海老名さんに至っては意味不明だったし。

自分の顔が自然とニヤけているのが分かる。フツ……。俺もゲーマーだった、ということか……。

「ヒッキー！起きてるよね？部室行こー!」

「……ああ。行くか」

葉山グループの連中との話を終えた由比ヶ浜が呼んだので、俺は顔のニヤケを抑え、バックを持って自分の椅子から立ち上がった。

そして、由比ヶ浜と教室を出ようと教室の扉まで歩く。

「あー八幡!」

俺たちが教室から出ようとした瞬間、後ろから戸塚が話しかけてきた。

「おおー戸塚!どうしたんだ!」

「うっわ!ヒッキーさいちゃんにだけテンション上がりすぎ!マジキ

モい！」

うっせえぞ由比ヶ浜！戸塚は可愛くて天使なんだから当たり前だろ！全く……なぜそれが分かんのだ。

「あ、あはは……。八幡たちは今から部活？」

「おう。戸塚もか？」

「うん。そうだよ。奉仕部、大丈夫？難しい依頼とかきてない？」

「ああ。まあ、大丈夫そうだ。心配してくれてありがとな。逆に聞くが、テニス部は問題ないか？」

「大丈夫だよ！ありがとう！」

「ヒツキー！そろそろ行かないと！ゆきのんに怒られちゃうよ！」

おっと。つい戸塚との話に夢中になってしまった。流石に部室に行かないとな。雪ノ下に怒られるのは勘弁だし。

「分かったよ。じゃあ、またな戸塚。テニス、頑張れよ」

「うん！またね八幡！」

戸塚と別れ、由比ヶ浜と共に奉仕部の部室に向かう。

……なんか、隣から視線を感じるんだが……。

「……おい。なんか用か、由比ヶ浜」

「え?!い、いや……ヒツキー、なんか機嫌いいなく……って。いいことでもあったの?」

「あ?そんなもん戸塚と話せたからに決まってるだろ」

「違う違う!確かにさいちゃんと話した後のヒツキーはいつも機嫌いいけど……。それ以外の時も、最近はずっと機嫌よさそうだからさ……」

な、なに……。?!そんなに顔に出ていた……。だと……。?!やだ!チヨロ恥ずかしい!……。うん。キモいな。

「まあ、めっちゃ楽しみなことが控えてるからな。テンション上がりずにはいられねえよ」

「え?!ヒツキーって修学旅行楽しみにするような人だったけ!」

「いや、修学旅行を楽しみにしてるわけじゃないんだが……」

「あ、部室着いた!やつはろー!ゆきのん!」

由比ヶ浜はそう言って部室の扉を開ける。

自分から聞いてきたのに、俺の話は最後まで聞いてくれないのん？俺の話なんて興味ないですかそうですか……。

「こんにちは。由比ヶ浜さん。あと、比企谷くんも」

「……うす」

由比ヶ浜と奉仕部の部室に入り、いつもの席に座る。

……俺の気のせいかもしれないが、最近雪ノ下の機嫌がいい気がする……。

その根拠は、最近俺への罵倒が少なくなっている気がするのだ。

現に部室に入って挨拶してきたとき、いつもならヒキガエルくんなどなどの罵倒が飛んでくるのに、今日は何もなく普通に比企谷くんと呼ばれた。もうこの時点で異常だな。異常。

……あれ？なんか悲しくなってきた……。

「どうぞ」

「ありがとーゆきのん！」

「……サンキュ」

そんなくだらないことを考えていると、雪ノ下が紅茶を淹れてくれていた。

一旦思考を中断し、雪ノ下が淹れてくれた紅茶を堪能する。

……うん。美味しい。流石は雪ノ下だな。

「ねえねえゆきのん」

「何かしら？由比ヶ浜さん」

「修学旅行楽しみだねー！もうあと一週間だよ！」

「……ええ。そうね。楽しみだわ」

ん？雪ノ下って修学旅行を楽しむにしようなやつだったのか？意外だな。

「え!?意外！ヒツキーもだけど、ゆきのんも修学旅行楽しみにできる人だったんだ！」

「失礼ね……」

「本当にな」

すると、雪ノ下がコホンと一つ咳払いしたかと思うと、俺たちに向かって言葉を紡ぎ出し始めた。

「……確かに以前の私なら、そこまで楽しみにしていなかったと思うわ。でも今は……その……ゆ、友人と言える人ができたから……」

「ゆ、ゆ、ゆ、ゆきのーん!!」

「キヤッ!だ、抱きつかないでもらえるかしら由比ヶ浜さん……。その、暑苦しいわ……」

「だつてえ……だつてえ!!」

……俺たちじゃなくて、由比ヶ浜にでした……。まあ、分かってたけどね?どれだけ雪ノ下の機嫌が良くても俺に対しての扱いが良くなるのかないよな。うん。ないわ。

俺はそんな二人を横目に、いつも通り自分のバックから文庫本を取り出して読み始めた。

11月6日の日曜日の昼。俺はベッドから出て飯を食べるためにリビングへ向かう。

……え?起きるのが遅いつて?日曜日だとこんなもんだろ。休日
は休むためにある日なんだからな。

「……ん?何だこのメモ?」

昼食を食べようと食卓に向かうと、その上に何かが書かれたメモが置いてあった。俺はそのメモを持って、書かれている文章を読む。

【お兄ちゃんへ。小町たちは外に食べに行つてくるであります!お兄ちゃん
はカップ麺でも食べておいてください!あと、ソーダアート・オンライン
楽しんできてね!お兄ちゃんが楽しんでくれると小町も嬉しいです!
あ、今の小町的にポイント高い!】

P. S. 後で

小町にもやらせてね!】

「……最後のがなきやな……」

俺はそう呟き、カップ麺を作るためにキッチンへ向かう。

つか今回は間違えなかったんだな。前はP・S.のことS・P. っつてやってたし。S・P. っつてどこのセキュリティポリスだよ。小町がちゃんと成長してて、お兄ちゃん嬉しいぞ。

さてと、今日は……カップラーメンでいいか。ちようどラーメン食べたかったし。

カップにお湯をいれ、タイマーを三分に設定しセットする。

3分間何をするかと悩みふと携帯を見ると、メールが来ていたことに気づいた。

「メール？誰からだよ……？」

『FROM 材木座

TITLE nontitle

八幡よ。いよいよSAOの正式サービス開始日であるな。まさかそれをプレイすることができるとは……真に羨ましいぞ八幡!!しかし、それをプレイできるのは選ばれた者の特権であるからな。楽しんでくるのだぞ八幡よ!!……あ、後、少しでいいからSAOプレイさせて。』

材木座かよ……。あいつ、SAOやりたいって言ったのに手に入られなかったからな……。仕方ない。あいつもゲーマーだし、今度やらせてやるか。

俺はメールの返信画面を開き、材木座に送るメールをうつ。

『ああ。思う存分楽しんできてやるよ。SAOやりたいなら来週末に家に来るか？今日は無理だが、来週末ならやらせてやる。後最後。いきなり素に戻ってんじゃねえよ。びつくりしちゃっただろうが。』

そうメールをうち、材木座に送ったと同時にタイマーが鳴った。カップラーメンが出来上がったのだ。

カップラーメンの蓋を開けた後、食器棚から自分の箸を取り出す。

「……いただきます」

そう言っつてラーメンを食べ始める。食べながら時間を見ると、もう12時30分だった。

……え？マジ？もうこんな時間なのん？確かSAO正式サービスの開始時間って13時だったよな……。

ヤベエ……。マジで急がないと間に合わねえじゃねえかよ……。俺はラーメンを急いで食べ、カップと箸を片付け、自分の部屋に戻る。

そして諸々の準備が終わった頃には、もうサービス開始時間の直前にまであっていた。

ゲームハードである《ナーヴギア》を持ち上げ、感慨深く呟く。

「ついに……。行けるんだな……。もう一度、あの世界に……」

ちらりと時計を見ると、時刻はすでに12時59分になっており、後10秒ほどで13時。つまりSAOの正式サービス開始時間になる。

慌ててヘッドギアを装着し、顎下で固定アームをロックする。

……10、9、8、7、6、5、4、3、2、1……0。

《リンク・スタート》

13時になった瞬間、俺は開始コマンドであるこの一言を呟きもう一つの現実へと旅立った――

第二話 もう一つの現実

暗闇に包まれた視界の中央から虹色のリングが広がり、そこをくぐっていく。

すると目の前に、ベータテスターの俺からすれば懐かしい風景が広がった。SAOにログインしたときに巨大浮遊城《アインクラッド》の中で一番最初にプレイヤーたちが降り立つ第一層の南端に存在するスタート地点、《はじまりの街》である。

「……ついに帰ってきたんだな……。この世界……。SAOに……。！」

俺は、全く気づかぬうちにそう呟いていた。

……これ、傍から見たら変人じゃね？……思ったことが口から出る癖、直さないとな……。いつキモがられるか分からん。

そんなことはさておき、武器屋に向かわないといけない。なぜなら、たとえばベータテスターといえども、今の状態はバリバリの初期装備なのだ。自分が使いたい武器を一、二本買えるだけのコルは支給されているので、そのコルを使って武器を買えば、モンスターと戦うことができる。SAOを楽しむなら、まずこれだろう。

βテストからの変更がなければだが、確か入り組んだ裏道に通常の武器屋より安く売られているお徳な武器屋があったはずだ。

俺はすぐにそこに向かおうと走り出そうとしたが、その前に、ある二人のプレイヤーが目にとまった。

それは、一人のプレイヤーが俺より一足先に駆け出していたもう一人のプレイヤーを呼び止めて、何かを頼んでいるという光景だった。

あの状況から推測するに、ニュービーのプレイヤーがベータテスターにレクチャー的なのを頼んでいるのだろう。

……あぶねえ……。走り出さなくて良かった……。もし俺が走り出していたら俺が捕まっていた可能性もある。

ぼっちの俺からしたら、捕まったら終わりだ。まともに話すことができずに気持ち悪がられてしまうだろう。そうなれば非常にまずい。主に俺のメンタル的部分が。

つまり俺は、ベータテスターとバレないようにしないといけないの

か。なら周りをキョロキョロと見渡して、いかにもニュービーです的な雰囲気醸し出しながら人に気づかれないようにひっそりと目的地に向かおう。俺のステルスヒツキーを駆使すれば、誰にも気づかれることなく目的地に着くことができるはずだ。何なら隠蔽スキルを超えているレベル。

……あれ？じゃあ俺隠蔽スキル取らなくてもよくね？やったぜ。……いや全然嬉しくねえ……。

そう判断した俺は走り出そうとしていた足を緩め、人が少ない建物側に寄って目的地に向けゆつくりと歩き出した。

なんとか誰にも気づかれず武器と防具を買い終え、《はじまりの街》の西側に広がる広大な草原フィールドに到着する。

周囲でも少くないプレイヤーがモンスターと戦っているはずだが、恐るべき広さゆえか俺の視界内にはその姿たちは見えない。

……良かった……。これなら普通にベータテスターとして戦うことができそうだな。

そう思い、ぐるりと辺りを見渡していたら、目の前にモンスターがポップした。そのモンスターは青イノシシ、正式名《フレンジー・ボア》でレベル1の雑魚モンスターである。SAOの中で、一番最初に戦うのに最も最適なモンスターが、この《フレンジー・ボア》だろう。

俺はそんな《フレンジー・ボア》を凝視しながら、迷うことなく腰の鞘から剣を引き抜いた。

しばらく見つめ合い、《フレンジー・ボア》の動向を伺う。やがて、《フレンジー・ボア》がしびれを切らしたかのように俺に向かってきた。

俺は《フレンジー・ボア》の突進を、左側に体を動かして避ける。その後すぐに剣を振り、《フレンジー・ボア》の側面に剣を連続で叩き込む。

そして少しだけ《フレンジー・ボア》から距離を取り、剣を中段に

構えてすう、ふー、と深呼吸をする。

……俺が腰を落として、剣を右肩に担ぐように持ち上げると、規定モーションが検出され、ゆるく弧を描いた俺の持つ剣の刃がオレンジ色に輝いた。

「おらっー」

俺は自分のこの掛け声と同時に左足で地面を蹴って、シユギーン！という心地よい効果音が響き渡るとともに、刃が炎の色の軌跡を宙に描く。

数あるソードスキルの中の片手用曲刀基本技《リーバー》が《フレレンジー・ボア》の首に命中した。

これによって、先程の俺の連続攻撃で三分の一ほど減っていた《フレレンジー・ボア》のHPをすべて吹き飛ばすことになり、《フレレンジー・ボア》がぶぎーという哀れな断末魔を上げポリゴン片となってガラスのように砕け散った。

……ああ……久しぶりだが、やっぱり気持ちいい。モンスターを倒したときの爽快感は健在だな。

すると俺の目の前に、加算経験値の数字が浮かび上がる。

……うん。流石にまだレベル1なだけあって上がりがまあまあ早いな。この調子で狩り続けければ、今日のうちに最低でもレベル2、3まではいけるかもしれない。

もっと戦えばレベル4やレベル5まで上げることができるとのかもしれないが、一度ログアウトして晩御飯を食べなければならぬし、その後は小町にもやらせてやらなければいけない。

……そういえば、ついβテストの時に使用していた武器である片手用曲刀を本能的に選んで、小町や材木座がプレイする時ほぼ確実にこの曲刀を使わなければいけないことになったが、大丈夫か？

……もし、曲刀が小町の使いたい武器じゃなくて、小町に嫌われたら……。

……俺は死ぬ。死んでしまう。

……え？材木座？材木座は大丈夫だろ。何ならノリノリで曲刀使っているところを想像できちゃうレベル。

まあ、今更悩んでも仕方ない。幸い、《スキルスロット》の2つの内一つは《片手用曲刀》で埋め、残りの一つは開けてある。

そこに別の武器カテゴリのスキルを入れるのは、SAOを攻略するに当たっては愚策だが、小町のためを思えばなんの問題もない。

取り敢えず今日はこの周辺で雑魚モンスターを狩り続けるとしよう。それでレベル2まで上がれば万々歳だ。

そう考えた俺は、新たなモンスターと戦うべく、広大な草原をさまよい始めた。

「おおおっ！」

正確な数は覚えていないが、何匹目かの《フレンジー・ボア》を片手用曲刀基本技《リーバー》で屠る。

加算経験値の数字を横目にちらりと時計を見ると、SAOが始まってからすでに四時間半が経とうとしていた。

……もう五時半になるのか……。そろそろログアウトしてもいいかもな。まだレベル2にはなっていないけど、流石にもう小町たちも帰ってきてる頃だろうし、一度顔を合わせて感想を言いたい気持ちもある。

俺は右手の人差し指と中指をまっすぐ揃えて掲げ、真下に降る。

すると鈴を鳴らすような効果音とともに、紫色に発光した半透明の矩形である《メインメニュー・ウインドウ》が現れた。

そして俺は右側の一番下にある《LOG OUT》ボタンを――

「……は？」

押さなかった。いや、押さなかったという方が正しい。なぜなら、そこに存在するはずのログアウトボタンがそもそも存在しなかったのだから。

……なんでないんだ？もしかして、ボタンの位置がβテストから変わったのか？

そう考えて色々メニューやらなんやらの中を探しまくったが、ど

の中にもログアウトボタンは存在しなかった。

「どうなってんだよ……」

GMコールも試したが、反応はない。これは、いよいよ怪しくなってきた。

ゲームから自発的に出られないなんてことはありえない。あつてはいけない。馬鹿げている。

そういつた言葉が脳を支配するが、今の現状がこうなのだ。受け止めるしかない。

その上で、なぜ、ログアウトできないのか。

……ただのバグならまだいい。だがもし、万が一、これが意図的なら——

その時突如、俺の思考を中断させるかのようにリンゴーン、リンゴーンという大ボリユームのサウンドが鳴り響いた。

「うおっ！な、なんだ？」

すると、俺の体を鮮やかな青の光の柱が包んだ。

そして、先程まで見えていた風景がどんどん薄れていく。

「この現象……《転移》か！」

《転移》はβテストのときに嫌というほど経験している。だからすぐに理解することができた。

だが俺は、《転移》を行えるアイテムを持ってもないし、コマンドも唱えていない。

つまりこれは、運営側の強制転移だ。俺以外のプレイヤーも強制転移させられている可能性が高い。

もしそうだとするなら、バグについてなにか説明があるのかもしれない。

俺がここまで考えた時、青い光が一際強く脈打ち、俺の視界を完全に奪っていった。

俺の視界が戻った時、そこはもう先程までいた草原の風景ではなかった。

俺の視界にあつたのは、広大な石畳に周囲を囲む街路樹と、瀟洒な

中世風の街並み。さらに正面遠くにある、黒光りする巨大な宮殿。

間違いない、《はじまりの街》中央広場そのものだ。

周りを見渡せば、そこら中に人がどんと湧いてくる。

やっぱり、SAOプレイヤー全員が強制転移させられたみたいだな。

なら、これから運営側からの説明が行われるはずだ。

そう思い、周りのざわめきを聞き流しながら運営のアナウンスを待つ。

「あつ……上を見る!!」

周りのざわめきの声を押しつけて、誰かがそう叫んだ。

俺はその声にしたがい、視線を上向ける。

すると、第二層の底が真紅の市松模様に染め上げられていった。

それを凝視してみると、それは「Warning」と「System Announcement」という英文が交互にパターン表示されている。

そして、その中央部分が、まるで巨大な血液のようにドロリと垂れ下がり、空中で形を変えていった。

出現したのは、全長二十メートルほどの真紅のフード付きローブをまとった顔なしの巨人だ。

……え？ 気持ち悪っ。いやなんで顔がないんだよ。バグの説明するのこんな凝った演出しなくてもいいだろ。

っーか怖いよ。怖い。あと怖い。

俺のそんな心の声を聞いてそれを抑えるかのように、不意に巨大なローブの右袖が動いた。

その時に広げられた袖口から純白の手袋が覗いたが、肉体はまるで見えない。

続いて、左袖もゆるゆると掲げられ、中身のない白手袋を左右に広げた。

『プレイヤーの諸君、私の世界へようこそ』

突然、そのような声が《はじまりの街》中央広場に響いた。

なぜ、誰が、私の世界とは、意味は――

そのような言葉が俺の脳内を駆け巡る。

そんな俺の思考を置いていくかのように、巨人は言葉を続けた。

『私の名前は茅場晶彦。今やこの世界をコントロールできる唯一の人間だ』

俺の思考はこの一言によって全て吹き飛んだ。

茅場晶彦。

この名前は流石の俺でも知っている。

俺はそこまで詳しくはないが、このSAOの開発ディレクターだったはずだ。

この巨人の正体が、茅場晶彦だと……？一体どうなってるんだ……。

『プレイヤー諸君は、すでにメインメニューからログアウトボタンが消滅していることに気付いていると思う。しかしゲームの不具合ではない。繰り返す。これは不具合ではなく、《ソードアート・オンライン》本来の仕様である』

「し……、仕様、だと」

隣のバンダナを付けたプレイヤーがそう割れた声でささやいた。

俺も今、そう思った。仕様と言うことは、バグではなかったってことだ。じゃあ一体、なんだっていうんだよ……。

『諸君は今後、この城の頂を極めるまで、ゲームから自発的にログアウトすることができない。……また、外部の人間の手による、ナーヴギアの停止あるいは解除もありえない。もしそれが試みられた場合——ナーヴギアの信号素子が発する高出力マイクロウェーブが、諸君の脳を破壊し、生命活動を停止させる』

「……は？」

俺はこの言葉を聞いて、開いた口が塞がらなかった。

生命活動の停止……それはつまり、端的に言えば、死ぬ……ということなのか……？

意味が分からん。たかがゲームで、そんなこと可能なわけが——
「原理的にはありえなくもないけど……でも、ハツタリに決まってる。だって、いきなりナーヴギアの電源コードを引っこ抜けば、とてもそ

んな高出力の電磁波は発生させられないはずだ。大容量のバッテリーでも内蔵されてない……限り……」

「内臓……してるぜ。ギアの重さの三割はバッテリーセルだって聞いた。でも……無茶苦茶だろそんなの！瞬間停電でもあつたらどうすんだよ!!」

……できちやうのかよ……

つまりだ。説明していた男はハツタリだと言っているが、可能な以上事実なのだろう。

ただこいつが言うように、瞬間停電でもあつたらマジでどうすんだよ……。全員死んじゃうぞ？

それに……そんなことをして何をすると言うんだ。俺たちプレイヤーをこんな状況にして、本当に何がしてえんだよ……

『より具体的には、十分間の外部電源切断、二時間のネットワーク回線切断、ナーヴギア本体のロック解除または分解または破壊の試み——以上のいずれかの条件によって脳破壊シークエンスが実行される。この条件は、すでに外部世界では当局およびマスコミを通して告知されている。ちなみに現時点で、プレイヤーの家族友人が警告を無視してナーヴギアの強制除装を試みた例が少なからずあり、その結果——残念ながらもすでに二百十三名のプレイヤーが、アインクラッド及び現実世界からも永久退場している』

す、すでに二百人近いプレイヤーが死んでいる……だと……？

俺は絶句し言葉が出ない状況に陥る。他のプレイヤーたちも様々な反応を見せているが、いい表情の者は一人も見当たらない。

「信じねえ……信じねえぞオレは」

隣のバンドナを付けたプレイヤーがその場に座り込み、そんな唖れた声を放った。

俺だって信じたくはない。だが、これが紛れもない事実なのだ。

そうじゃなきゃ、わざわざ茅場晶彦が出てくる意味が見つけられない。

それに、色々と辻褃が合いすぎている。

『諸君が向こう側に置いてきた肉体の心配をする必要はない。現在あ

らゆるテレビ、ラジオ、ネットメディアはこの状況を、多数の死者が出ていても含め、繰り返し報道している。諸君のナーヴギアが強引に除装される危険はすでに低くなっていると云ってよかろう。今後、諸君の現実の体は、ナーヴギアを装着したまま二時間の回線切断猶予時間のうちに病院その他の施設へと搬送され、嚴重な介護態勢のもとに置かれるはずだ。諸君には、安心して……ゲーム攻略に励んでほしい』

「何を言ってるんだ！ゲームを攻略しろだど!?ログアウト不能の状態で、呑気に遊べつてののか!?こんなの、ゲームでもなんでもないだろうが!!」

茅場晶彦がその言葉を言い終わった直後、バンドナを付けたプレイヤーの隣にいる男性プレイヤーが茅場晶彦に言い放った。

その言葉は俺の、いや、俺たちSAOプレイヤーの心の声を代弁したものだっただろう。

しかし、そんな叫びをもともせず、茅場晶彦は先程と変わらない様子で話を続ける。

『しかし、充分に留意してもらいたい。諸君にとって《ソードアート・オンライン》は、すでにただのゲームではない。もう一つの現実と言うべき存在だ。……今後、ゲームにおいて、あらゆる蘇生手段は機能しない。ヒットポイントがゼロになった瞬間、諸君のアバターは永久に消滅し、同時に諸君らの脳は、ナーヴギアによって破壊される』

俺は再び絶句した。

……いや、今までの茅場晶彦の話の中で予想できたことだ。だが、それでも、絶句せざるをえなかった。

信じたくないのだ。

ここで死んでしまったら現実でも死んでしまうということ。

もう、小町や戸塚……雪ノ下や由比ヶ浜たちに会えなくなってしまうという事実を。

そもそもSAOがデスクゲームと化したという事実を。

俺は、信じたくないのだ。

そんな俺の思いなどお構いなしに、茅場晶彦は話を続ける。

『諸君がこのゲームから解放される条件は、たった一つ。先に述べたとおり、アインクラッド最上部、第百層まで辿り着き、そこに待つ最終ボスを倒してゲームをクリアすればよい。その瞬間、生き残ったプレイヤー全員が安全にログアウトされることを保証しよう』

プレイヤーたちに一瞬の静寂がおとずれた後、バンダナを付けたプレイヤーががばつと立ち上がり右拳を空に向かって振り上げた。

「クリア……第百層だとお!?で、できるわきゃねえだろうが!!ベータじゃろくに上がれなかつたって聞いたぞ!!」

……俺もこのプレイヤーと概ね同意見だな。百層まで登るなんてできるわけがない。

俺はベータテスターだから、この世界の難しさもよく知っている。クリアできるとしても、何年かかるかわからないし、それこそそこまで自分が生きていられるという保証もない。

……なら、俺はもう戻ることができないのか……?愛する小町のもとに……戸塚のもとに……あの部室、奉仕部に――

『それでは、最後に、諸君にとつてこの世界が唯一の現実であるという証拠を見せよう。諸君のアイテムストレージに、私からのプレゼントが用意してある。確認してくれ給え』

この茅場晶彦の言葉に、俺はほぼ反射的にメインメニューを開き、アイテム欄のタブを叩く。

すると、所持品リストの一番上に《手鏡》というアイテムがあった。俺は《手鏡》をタップし、オブジェクト化する。

そしてその後、俺は、他のプレイヤーたちもだが、白い光に包まれた。

その光は二、三秒で消えてそのまま鏡を覗き込むと――

そこには、現実の俺の顔があった。

「うっおうー……何だ俺かよ……」

一瞬、俺の腐った目が相まって、顔がゾンビに見えてしまった。きつと四時間半ほどイケメン顔で過ごしていた弊害だろう。

……つか俺、ついに自分でもゾンビと間違えちゃったよ……。なんて悲しい事実だ……。

……でも、これで茅場晶彦の言っている意味が分かった。
ここはもう一つの現実である……。これは、こういう意味だったのだ。

現実の俺たちと同じ姿で、この世界で命をかけて戦う。それはつまり、現実。

ラノベでいうところの異世界転生・転移が近いか？

……だが、まだ疑問は残っている。なぜ茅場晶彦はこんなことをしでかしているのか。

ここが、一向につかめない。

『諸君は今、なぜ、と思っっているだろう。なぜ私は——SAO及びナーヴギア開発者の茅場晶彦はこんなことをしたのか？これは大規模なテロなのか？あるいは身代金目的の誘拐事件なのか？と』

……はいその通りです。めっちゃくちや考えてました。

なんなの？ほぼ最初から思ってるけど、もしかして茅場晶彦って心読めるの？

いやマジもんの天才かよ。……そういやこの人天才だったわ。

『私の目的は、そのどちらでもない。それどころか、今の私は、すでに一切の目的も、理由も持たない。なぜなら……この状況こそが、私にとつての最終的な目的だからだ。この世界を創り出し、鑑賞するためにも私はナーヴギアを、SAOを造った。そして今、全ては達成せしめられた。……以上で、《ソードアート・オンライン》正式サービスのチュートリアルを終了する。プレイヤー諸君の——健闘を祈る』
そう言つて茅場晶彦は上昇して、システムメッセージに溶け込むように同化していき、現れた時と同じように突然消滅した。

そして茅場晶彦が消えた後、《はじまりの街》は数々のプレイヤーの絶叫で包まれた。

……俺は、このまま死んでもいいのか……？いや、駄目だ。

……小町や戸塚を、泣かせてもいいのか……？駄目だ。絶対に駄目だ。

……なら、どうすればいい……。このクソゲーをクリアしてやればいい。

何年かかってもいい。生きて帰れさえすれば、それでいい。抗え。戦え。いつかの漫画の主人公も言っていた。『戦わなければ勝てない』と。

……よし。覚悟は決まった。

やってやるよ茅場晶彦。俺はこのSAOを、もう一つの現実をクリアしてみせる。戦い抜いてみせる。あいつらの元に、帰るために。

小町、親父に母ちゃん、戸塚、雪ノ下、由比ヶ浜、平塚先生、皆……あと材木座……。

待っていてくれ。俺は必ず、お前らのもとに帰ってみせるから。

だから、少しでいい。ほんの少しでいいから、俺に勇気を与えてくれ。戦う勇気を、与えてくれ。

俺が戦う、理由になってくれ。

第三話 閃光との出会い

もう一つの現実、SAOというデスゲームが始まって、一ヶ月が経過しようとしていた。

それだけの期間が過ぎても、未だにこの浮遊城アインクラッドは一層も攻略されていない。

俺は、少しでもレベルを上げる為に《第一層迷宮区》に潜っている。そんな俺の目の前には、レベル6亜人型モンスター、《ルインコボルド・トルーパー》と、ある一人のレイピア使いのプレイヤーがいた。そのプレイヤーは《ルインコボルド・トルーパー》の斧を三連続で避け、反撃に細剣カテゴリのソードスキルである、単発突き攻撃《リニア》を撃ち込む。そのパターン化された攻防を三回繰り返し、《第一層迷宮区》の中でもかなりの強敵である《ルインコボルド・トルーパー》をノーダメージで屠った。

そして、そのレイピア使いはよろめいて、通路の壁に背中をぶつける。そのままズルズルと座り込み、荒い呼吸を繰り返していた。

俺は、そんなレイピア使いの前をそのまま通り過ぎ、自分の獲物を探すためにゆっくりとその場から歩き出す。

……あのレイピア使いが放った《リニア》は、今まで見てきたレイピア使いの中でも群を抜いた完成度だった。

まるで閃光を想起させるような、視認することも許さないスピード。正直、あのソードスキルはとても恐ろしく、そして同時にとても美しく見えた。

……ちよつとだけ見惚れていたのは内緒だ……。……ちよつとだよ？ガッツリ見惚れてなんかないよ？ホントだよ？ハチマンウソツカナイ。

それにしても、最後の一撃。あれ《リニア》じゃなくてもよかつただろ……。「流石にさっきのはオーバーキルすぎるわ……」

「……待って」

「……あん？」

後ろから、声をかけられたので振り返る。俺に声をかけたのは、や

はりというべきか先程まで戦っていたレイピア使いだった。

そして、俺はその声で一つの事実を知った。

「……こいつ、女性プレイヤーじゃん……。話すの苦手なんですけど……。」

「……オーバーキル？つてなに？それをしたら、何かあるの？」

「……まさか、また心の声が漏れてたのか……？じゃないとオーバーキルの単語が出ることはないはずだ。」

「……本来なら無視して行きたいところだが、自分から言葉に出してしまった手前引き下がれない。ここはさっさと説明して立ち去るのが吉だな。」

「……はあ。あー、オーバーキルはだな、あれだ。モンスターの残りHP量に対して与えるダメージが過剰って意味だ。別にオーバーキルしてもシステマ的なデメリットがあるわけじゃねえけど、効率が悪いんだよ」

「……効率？」

「そうだ。ソードスキルは集中力を要求されるから、連発しすぎると精神的な消耗が早くなる。帰り道もあるんだから、なるべく疲れない戦い方をしたほうがいいってことだ」

「なるほどね……。それなら問題ないわ。わたし、帰らないから」

「……は？か、帰らないってお前……。町にか？」

俺がそう問いかけると、そのレイピア使いの女性プレイヤーは小さく首を動かし、コクリと頷いた。

そんな女性プレイヤーに、俺は気になったことを質問する。

「……ポーションの補充とか、装備の修理とか、あとは睡眠とか……。この辺はどうしてんだよ？マジで」

「ダメージを受けなければ薬はいらないし、剣は同じのを五本買ってきた。……休憩は、近くの安全地帯で取ってるから」

女性プレイヤーのその言葉に、俺は絶句してしまう。

確かに安全地帯ならモンスターが出現しないので小休止くらいならできるが、とても熟睡できるような場所ではない。しかし、この女性プレイヤーはそんな安全地帯を宿代わりにしてダンジョンにこも

り続けているというのだ。

にわかには信じがたい事実だが、女性プレイヤーの疲労困憊な姿を見るに、その言葉がまちがっていないのだと信じざるを得なかった。

「……何時間……いや、何日続けてんだ……？」

最初は何時間を聞こうと思ったが、彼女の姿を見て何日かに変えた。

彼女のケープはもう、耐久力の損耗を示して各所がボロボロに解れていたのだ。

何時間かこもったぐらいでは、『ダメージを受けなければ』と豪語する彼女の、俺のケープと色違いのケープがここまでになるのは考えにくい。最低でも、二日はダンジョンにこもり続けているはずだ。

「三日……か、四日。……わたしから話しかけておいてなんだけど……もう、いい？そろそろこのへんの怪物が復活してるから、わたし、行くわ」

女性プレイヤーは薄手のレザーグローブに包まれた華奢な左手を壁にあて、よろよると立ち上がった。

抜いたままの細剣を、まるで両手剣を片手持ちしているかのように重そうにぶら下げながら、女性プレイヤーは俺に背中を向け、一歩、また一歩と俺から遠ざかっていく。

俺はそんな細い背中に向かって、自分が思ったことをそのまま口に出した。

「……そんな戦い方してたら、お前死ぬぞ」

俺がその言葉を発した瞬間、彼女はピタリと歩みを止め、右の壁に肩を預けてゆっくり振り向いた。

彼女のフードの奥の瞳が、薄赤く底光りしながら俺を射抜く。

「……どうせ、みんな死ぬのよ。たった一ヶ月で、二千人も死んだわ。でもまだ、最初のフロアすら突破されていない。このゲームはクリア不可能なのよ。どこでどんなふうにも死のうと、早い……遅い……だけの、違い……」

今までで最も長く、最も感情のこもった彼女の言葉が途中で揺らぎ、途切れた。

反射的に一步踏み出していた俺の目の前で、女性プレイヤーは、まるで麻痺状態になったかのように緩やかに地面へとくずおれた。

「お、おい！お前！」

俺は慌てて彼女に駆け寄ったが、ただ気絶しただけのようだ。これこそソードスキル連発の弊害だろう。

この場に放おつておいてもいいのだが、そうすると彼女は確実に死んでしまう。これほどのプレイヤーは最前線でもそうそういない。間違いなく、今のSAOでの上位プレイヤーの一角だろう。

それにこのまま彼女が死ぬと俺の寝覚めが悪いし……。

はあ……仕方がないが安全な場所に運ぶとしますか……。

「ハ、ハチ……だよな？」

不意に後ろから、今では聞き慣れるようになった声が聞こえた。

俺が聞き覚えのある声など、本当にたかがしれている。聞き慣れている声はなおさら少ない。

俺はゆっくりと声の聞こえた方を向き、その声の主を確認する。

「……キリトか」

そこには、黒髪で灰色コートの片手剣使い、キリトが立っていた。

キリトとは、デスゲームが始まった日、ホルンカの村でパーティーを組んでからの付き合いだ。

それから時々パーティーを組むようになり、今では俺がフレンド登録しているたった二人のプレイヤーの一人にまでなっている。

「合つて良かった……。フードで顔が見えなかったから、そのケーブと曲刀で予想したんだけどさ……。それで、そいつどうしたんだ？」

「あー、なんか気絶したっぽい。ここに置いてくのもあれだし、運ぶの手伝ってくれね？俺のアイテムを預かってくれるだけでもいいからよ」

「お、おう。まあいいけど。幸いストレージにも空きがあるし」

「助かる。じゃあ、取り敢えず迷宮区の外まで一緒に頼むわ」

「了解」

俺はキリトと共に倒れた女性プレイヤーを迷宮区の外まで運ぶた

め、彼女を抱えあげて歩き出した。

第四話 彼と彼女の意志

今俺の目には、ある一人の女性プレイヤーと、黒々とそびえ立つ天蓋まで届く巨大な塔——アインクラッド第一層迷宮区がある。

俺はその視線を下に向け、深くため息を吐いた。

……ここまで運ぶのは結構大変だった……。いやマジで……。

キリトは女性プレイヤーを運んだ後、そのままダンジョンへ戻っていった。

なんでも、今日のレベル上げのノルマをまだ達成していなかったらしい。

俺とキリトが運んだ女性プレイヤーは、まだ下生えの上で眠ったままだ。

もう彼女が倒れてから、七時間近くもたっているが……。よっぽど消耗していたのだろう。

……まあ、三日、四日もダンジョンにこもり続けているなら、仕方がないと言える。

もつとも、三日か四日もダンジョンにこもり続けたことはないの
で、どれだけ消耗するのかは知らないが。

そんなことを考えていると、ガサツツという音がしたので、下に向けていた顔をその音が聞こえた方向に向ける。

するとそこには、俺とキリトが運んできた女性プレイヤーがいた。
その女性プレイヤーは先程まで閉じていた両の瞼を開き、俺を見て

いた。

必然的に、俺とその女性プレイヤーの視線がぶつかる。

その瞬間、女性プレイヤーは低く掠れた声を絞り出すようにして口から発した。

「余計な……ことを」

……確かに、俺がしたことは彼女にとっては迷惑だったかもしれない。
余計なことだったかもしれない。

……彼女が本当に死にたいと思っっているならの話だが。

「余計な……」

「……別に、お前を助けたくて助けたわけじゃねえよ」

「……………なら、なんで置いていかなかったの」

「助けたかったのは、お前が持っているマップデータだ。最前線近くに三日四日もってたって言うなら、未踏破エリアもかなりマップピングされてんだろ。お前と一緒にそのデータが消えてしまうのはもつたない」

「……………なら、持って行けば」

そう、彼女は低く呟き、メインウィンドウを開く。

そして彼女はマップデータをすべて羊皮紙アイテムにコピーして、それをオブジェクト化し、俺の足元に放り投げてきた。

「それで、あなたの目的は達したでしょう。じゃあ、私は行くわ」

彼女は下草に手を突いて立ち上がるが、わずかに足がふらついている。

七時間近くも寝ても、完全に回復はしていないようだ。

俺はそんな彼女の背中に向かって、ある言葉を投げかけた。

「待てよ。……………行くってというのは、死にかか？」

彼女は俺のその言葉にピクツと反応すると、ゆっくりと俺の方を向き口を開いた。

「……………言ったでしょう。どうせみんな死ぬって。それなら私は戦って死ぬわ」

「……………お前はなぜ戦う？どうせ死ぬって言うなら、アインクラッドから飛び降りて死んでも同じだろ？」

「……………わたしが……………わたしでいるため。最初の街の宿屋に閉じこもって、ゆっくり腐っていくくらいなら、最後の瞬間まで自分のままでいたい。たとえ怪物に負けて死んでも、このゲーム……………この世界には負けたくない。どうしても」

……………やはりそうだ。彼女は、別に自殺願望を持ってダンジョンに潜っていたわけじゃない。

明確な、強い意志を持って、彼女は戦っていたのだ。

もつとも、その戦い方は褒められたものではないが。

「……………それでも、そんな戦い方はやめとけ。早死しちまうぞ」

「だから、どうせみんな——」

「俺は死ぬつもりはない」

俺が発したその声で、彼女が少しビクツつと震えた。

俺はそんな彼女に構わず、言葉を続ける。

「俺はこの世界……このゲームに勝って、必ず帰ってみせる。クリア不可能とか関係ない。必ずだ……!」

「……なら、どんな戦い方をすればいいのよ……?まさか、あなたが教えてくれるとか言わないでしょうね……?」

彼女は鋭い目つきで俺を真っ直ぐに見つめ、そう聞いてきた。

その目は、どうすればこの世界に勝てるのかを聞いているようにも見える。

……彼女は諦めてなどいなかった。ただ、知らなかったただけだったのだ。知らなかったから、こうなってしまったのだ。

ならば、俺が教えなければならぬ。彼女がここまでになってしまったのは、ある意味では俺のせいなのだから。

「……ああ。戦い方をレクチャーしてやってもいい。だが、その前にお前を連れていきたいところがある」

「……なに?」

「今日の夕方に迷宮区最寄りの《ツールバーナ》の町で行われる、一回目の《第一層フロアボス攻略会議》だ」

俺は女性プレイヤーと並んで……いや、並んでというには少し離れ過ぎだが、そのような間隔を保ったまま森を抜け、ツールバーナの北門をくぐった。

すると俺の視界に、【INNER AREA】という紫色の文字が浮かぶ。

安全な街区圏内に入ったことを知らせるものだ。

俺はそれを確認した後、彼女の方を向き口を開いた。

「会議は町の中央広場で、午後四時かららしい。それまではこの町で

おとなしくしてろ。俺は少し用がある」

俺がそう言うと、俺と色違いのフードに隠れた彼女の顔が、かすかに上下した。

しかし彼女の足は止まることなく、そのまま俺の前を通り過ぎていく。

俺はそんな彼女を見送った後、俺を呼び出したやつが何処に居るのかを確かめるためにメインウィンドウを開いた。

「妙な女だよナ」

その瞬間、俺の背後からいきなりそのような眩きが聞こえた。

俺はすぐにメインウィンドウを閉じて、その声が聞こえた方に振り返る。

するとそこには、俺を呼び出した張本人が立っていた。

「……すぐにでも死にそうなのに、死なない。どう見てもネトゲ素人なのに、技は恐ろしく切れル。何者なのかネ」

「……知ってるのか？あいつのこと」

俺は半ば無意識でそう訊ねたが、こいつにこの言葉を言ってしまったことをすぐに後悔した。

この後にこいつが言うことなど、俺でなくても分かるだろう。

そんな俺の予想を裏切ることなく、こいつは指を五本立てて、口を開いた。

「安くしとくヨ。五百コル」

にんまりと笑うその顔の両頬には、動物のヒゲを模した三本線がくつきりと書き込んである。

そんな顔をしたこいつに対して、俺は質問の答えを返した。

「生憎、俺が女子の情報を買ったらストーカー扱いされて黒鉄宮の監獄エリアに送られるまであるからな。遠慮しとくわ」

「にひひ、相変わらずおもしろいな！ハチ公ハ！」

「毎回言ってるが、誰が渋谷駅にいる忠犬だよ……。普通にハチでいいだろうが……」

「ならハチ公も、オレつちを鼠って呼ぶのをやめるべきだと思うんだけどナ。ほら、試しにアルゴって呼んでみるヨ」

「……で、何の用だ。鼠。またいつもの代理交渉か？」

俺がそう言うと、鼠……アルゴの顔が渋面になり、ちらりと通りの左右を見回すと、俺の背中を指先で押して近くの路地へと移動させた。

会議まではまだ二時間あるのでプレイヤーの姿は少ないが、絶対に他人に聞かれたくない話らしい。

細い路地の奥で立ち止まったアルゴは背中を民家の壁に預け、改めて頷いた。

「まあナ。二万九千八百コルまで引き上げるソーダ」

「ニーキュツパねえ……」

俺ははあ、とため息をつき、次いで肩をすくめて口を開いた。

「悪いが、何コル積まれても答えは同じだ。売る気はねえよ」

「オレっちも、依頼人にそう言ったんだけどナー」

「……これで話は終わりか？なら、俺はもう行くぞ」

「オツケ。んじゃ、依頼人には今度も断られたって伝えとくサ。この交渉は無理筋だ、ともナ。ほんじゃまたナ、ハチ公」

ひらっと手を振り、身を翻すと、アルゴは鼠の名に相応しい敏捷さで表通りへと去った。

俺はそんなアルゴを見送り、時刻を確認する。

今、午後三時を少し回ったところだ。そろそろ、会議に向けて腹ごしらえをしておかなければならない。

四時から行われる会議は、間違いなく荒れるだろう。

なぜなら、ニュービーたちとベータテスターたちの埋めがたい溝が晒されるからだ。

だがその溝は、この世界を、このゲームをクリアするために埋めなければならぬ。

ならどうするか。簡単だ。お互いがみ合うというのなら——俺という共通の敵を、用意してやればいい。

「……これをくれ」

「まいど！一コルだよ！」

NPCの店員に一コルを支払い、黒褐色の丸型オブジェクトである黒パンを購入する。

俺はその黒パンをポケットに仕舞い、NPCベーカリーを出た。

そして、座って食べられる場所を探し始める。

トールバーナの町の中心部、噴水広場に着くと、その片隅にある素朴なベンチに一人の女性プレイヤーが俺が買ったパンと同じパンを食べながら座っていた。

俺はそんな彼女の近くまで行き、右側から声をかける。

「結構美味いよな、それ」

彼女は俺の声を聞いて、パンをちぎろうとしていた手を止め、俺を鋭く一瞥してきた。

そのあと彼女は半月型になっている黒パンを両手に保持したまま固まってしまった。

俺はしばらく待っても彼女から何も返ってこないのので、小さく咳払いをして口を開く。

「隣に座るぞ」

俺がそう言っても、彼女は何の反応も示さない。

俺はそんな彼女の沈黙を肯定だと判断し、ベンチの右端に腰を落としました。

そしてポケットから、先程NPCベーカリーで買った黒パンを取り出す。

すると彼女が唾然とした顔で俺を見てきて、口を開いた。

「……本気で、美味しいと思ってるの、それ？」

「ああ。少し工夫はするがな」

「工夫……？」

彼女がそう言って首を傾げた。

まあ、知らなければ知らないだろう。このクエストをやる奴も少ないしな。

俺は黒パンを出したポケットとは反対のポケットから、小さな素焼

きのツボを取り出す。

そしてそれをベンチの真ん中に置いた。

「……そのパンに使ってみろ」

彼女はおそろおそろ右手を伸ばし、指先でツボの蓋をタップした。そしていくつかのボタンをタップしてから、紫色に光った指先を食べかけのパンにあてがう。

すると、かすかな効果音とともにパンの片面が白く染まった。

「……クリーム？こんなもの、どこで……？」

「二つ前の村で受けられる《逆襲の雌牛》つつうクエストの報酬だ」

俺は彼女にそう返し、自分の黒パンにもクリームを付けて、食べ始める。

彼女はそんな俺を少しの間見ていたが、やがて彼女も自分の黒パンを食べ始めた。

あっという間に俺と彼女の黒パンは、その姿を消していった。

……うむ。やはり美味しい。キリトに進められて受けたクエストだったが、受けて本当に正解だったな。

このクリームにはクエスト以上の価値がある。

俺がそんなことを考えていると、彼女の口が開き消え入りそうな声でこう言った。

「……………ご馳走様」

「おう。……どうだった？」

「……美味しかった」

「……そうか」

……これで、彼女もこの世界での安らぎを、楽しみを知ってくれればいいのだが。

俺達は、この世界で生きている。戦って、死ぬことだけがこの世界で生きたということじゃない。

この世界で戦わずに生活することだってできるし、剣を打ったり装備品を作ることでもこの世界と戦うことだってできる。

たとえ最前線で戦うとしても、安らぎや楽しみを持っていたほうがいいだろう。

「……ねえ、なにじつと見てるの？」

「っーい、いや……悪い……」

どうやら、彼女のことを凝視してしまっていたようだ。

彼女は怪訝な顔をしながらも、俺に向かって口を開いた。

「……まあ、いいけど。それより——」

彼女の言葉の途中で、街の中央にそびえる一際巨大な風車塔が、風力で動く時鐘を高らかに打ち鳴らした。

午後四時、会議が始まる時間だ。

彼女から視線を外し少し離れた噴水広場を見ると、いつの間にか多くのプレイヤーが集まってきている。

「……行きましょう。聞きたいことは後で聞くわ」

「……そうだな。行くか」

彼女がベンチから立ち上がるのに続き、俺もベンチからゆっくりと体を起こす。

俺と彼女は並んで……トールバーナの北門をくぐったときよりも近い間隔で、会議が行われる噴水広場に向かって歩き出した。

第五話 第一層フロアボス攻略会議

女性プレイヤーと共に噴水広場に着いた俺は、ここに集ったプレイヤーの数を数えていた。

四十五人。それが、俺を数えツールバーナの噴水広場に集ったプレイヤーの総数だった。

俺の期待通りとはいかなかったが、まあこんなもんだろう。できれば、レイドパーティー一つ分の人数以上はいてほしかったが、贅沢は言えない。

デスゲームとなったこのSAOにおいて、これだけいれば多いほうだ。

「……こんなに、たくさん……」

俺の横で、女性プレイヤーがそう呟いた。

俺はその女性プレイヤーを一瞥してから彼女に言葉を返す。

「……そうだな。もう少し多いとも思っていたんだが……。これだけ集まれば、まあいいほうだろう」

「ええ。だって……全滅する可能性もあるはずなのに……」

「……ま、単に遅れたくないって奴のほうが多いと思うけどな」

「……遅れる？何から？」

「最前線からに決まってるだろ。全滅するのももちろん怖いけど、やっぱりゲーム者だったら勝手にボスが倒されてるっていうのは、嫌に決まってる。特にこのSAOは、レベル制MMOだからな。遅れれば遅れるほど、レベルも離されていくし」

まあ、彼女には理解し難いだろう。

これまでの行動を見るに、彼女がネットゲームビギナーであることはほぼ間違いない。

「……それって、学年十位から落ちたくないとか、偏差値七十キープしたいとか、そういうのと同じモチベーション？」

「……あ、ああ。まあ、似たようなもんかもな……」

まさかの例えに俺が困惑しながらもそう返すと、フードの下に覗く唇がほんの少し綻んだ。

ふ、ふふ、というかすかな声まで聞こえる。

笑っている……のか？ 迷宮区から運び出した俺に『余計なことを』
と言いつ放ってきたレイピア使いの女性プレイヤーが？

思わず、彼女のフードの奥を覗き込みかけたが、俺がそうする前に
パン、パンと手を叩く音が聞こえた。

俺はその音で、我に返る。

あ、危ねえ……。あのまま覗き込んでいたら顔叩かれてもおかし
くなかったぞ……。だって俺だもんな。

手を叩いた奴マジでナイス。そう思っていると、手を叩く音が消え
た直後に、よく通る叫び声が広場に流れた。

「はーいーそれじゃ、五分遅れだけどそろそろ始めさせてもらいます
！みんな、もうちよつと前に……。そこ、あと三步こつち来ようか！」

その喋りの主は、長身の各所に金属防具を煌めかせた青髪の片手剣
使いだった。

彼は広場中央にある噴水の縁に、助走なしでひらりと飛び乗る。

あの高さをあの装備でワンジャンプか……。筋力・敏捷力はかなり
高いな。

……。つーかあいつ、イケメンだな。なんでこんな奴がVRMMOを
やってんだ？

声は心做しか材木座に似てる気がするのにな……。

「今日は、オレの呼びかけに応じてくれてありがとう！ 知ってる人も
いると思うけど、改めて自己紹介しとくな！ オレは《ディアベル》、職
業は気持ち的に《ナイト》やってます！」

すると、噴水近くの一団がどつと沸き、口笛や拍手に混じって「ほ
んとは《勇者》って言いてーんだろ！」などという声が飛んだ。

……。しかし驚いた。こんな会議を開くぐらいのプレイヤーだから、
βテストの時にもいた奴だと思っていたんだが……。

ディアベルという名は、少なくとも俺は聞いたことがない。

……。まあ、名前を変えたという可能性もあるが……。

「さて、こうして最前線で活動している、言わばトッププレイヤーのみ
んなに集まってもらった理由は、もう言わずもがなだと思うけど

……」

ディアベルが演説を再開したので、俺はこの考えを中断し、ディアベルの方に集中した。

ディアベルはさつと右手を挙げ、街並みの彼方にうつすらとそびえる巨塔——第一層迷宮区を指し示しながら続ける。

「……今日、オレたちのパーティーが、あの塔の最上階へ続く階段を発見した。つまり、明日か、遅くとも明後日には、ついに辿り着くってことだ。第一層の……ボス部屋に！」

どよどよ、とこの場にいるプレイヤーがざわめく。

俺も驚きで目を見開いた。俺と隣の彼女が潜っていたのが十八階から十九階上がったあたりだったが、まさか十九階がそこまでマツピングされているとは……。

「二ヶ月。……ここまで、一ヶ月もかかったけど……それでも、オレたちは、示さなきゃならない。ボスを倒し、第二層に到達して、このデスゲームそのものもいつかきつとクリアできるんだってことを、はじまりの街で待つてるみんなに伝えなきゃならない。それが、今この場にいますオレたちトッププレイヤーの義務なんだ！そうだろ、みんな！」
ディアベルがそう言い終わると、再び大きな拍手がこの場で響いた。

……まあ、言ってることは間違ってるし、立派なことだ。……だが、この言葉によって俺の苦手なタイプだということも確定した。……まるで、葉山を見ているようだ。

しかし、この最前線にいるプレイヤーをまとめたことは称賛に値する。

……これは、俺の出番はないかもな。このままうまくまとまれば、の話だが。

「ちよお待ってんか、ナイトはん」

今まで流れていた歓声を切り裂き、そんな声が低く流れた。

それによって歓声がびたりと止まり、前方の人垣が二つに割れる。空隙の中央に立っていたのは、サボテンのように尖った髪をした男性プレイヤーだった。

「そん前に、こいつだけは言わしてもらわんと、仲間ごっこはでけんな」

……ほらな。来たよ。まあ、そう簡単にうまくまとまるわけがないな。葉山だつてクラスの中心にいたけど、俺だけはまとめきれなかったし。

何事にも、例外つてのはあるもんだ。

だが、そんな唐突な乱入だったにも関わらず、ディアベルは笑顔のまま、手招きしながら言う。

「こいつつていうのは何かな？まあ何にせよ、意見は大歓迎さ。でも、発言するならいちおう名乗ってもらいたいな」

「……………フン」

サボテン頭は盛大に鼻を鳴らすと、一步、二歩と前に進み出て、噴水の前でこちらに振り向いた。

「わいは《キバオウ》ってもんや」

そう名乗ったサボテン頭の片手剣士は、鋭く光る両眼で広場の全プレイヤーを睥睨した。

横薙ぎに移動する視線が、俺の顔の上ともう一人の顔の上で一瞬停止した——ような気がする。

まあ、気の所為だろうが……。俺はあいつの姿も名前も聞いたことがない。

だが、少し気になったのもう一人の方を見てみると、そこにはキリトがいた。

……もしかしたらキリトの知り合いで、キリトから俺のことを聞いていたのかもしれない。

……まあ、今は分かりようがないことだ。後でキリトに聞いてみるとうしよう。

キバオウはたっぷり時間を掛けて一回を見回し終わると、いつそうドスの利いた声で言った。

「こん中に、五人か十人、ワビい入れなあかん奴らがおるはずや」

「詫び？誰にだい？」

「はっ、決まっつとるやろ。今までに死んでった二千人に、や。奴らが何

もかんも独り占めしたから、一ヶ月で二千人も死んでもたんや！せやろが!!」

途端、低くざわめいていた約四十人の聴衆が、ぴたりと押し黙った。やつと、全員が理解したのだろう。この男が、何を言いたいのかを。

「——キバオウさん。君の言う《奴ら》とはつまり……元ベータテスターの人たちのこと、かな？」

「決まっとるやろ」

革の上に分厚い金属片を縫い付けたスケイルメイルをじやらりと鳴らし、キバオウは背後の騎士を一瞥してから続けた。

「ベータ上がりどもは、こんクソゲームが始まったその日にダツシユではじまりの街から消えよった。右も左も判らん九千何百人のビギナーを見捨てて、な。奴らはウマイ狩場やらボロいクエストを独り占めして、ジブンらだけぽんぽん強うなつて、その後もずーっと知らんぷりや。……こん中にちよつとはおるはずやで、ベータ上がりちゆうことを隠して、ボス攻略の仲間に入れてもらお考えてる小狡い奴らが。そいつらに土下座さして、貯め込んだ金やアイテムをこん作戦のために軒並み吐き出してもらわな、パーティーメンバーとして命は預けられんし預かれんと、わいはそう言うとるんや!」

名前の通り牙の一咬みにも似た糾弾が途切れても、やはり声を上げようとする者はいなかった。

ま、当然だな。キバオウが言っていることは、ビギナーの者たちにとって、少なからず思っていたことであつただろうし。

だが、不味いな……。今ここで俺がベータテスターだと言つたとしても、ヘイトが俺だけでなく他のベータテスターにも向いて、ベータテスター探しが始まってしまう可能性がある。

どうする……。どうやって俺だけにヘイトを向けさせる……。

「発言、いいか」

その時、豊かな張りのあるバリトンが、夕暮れの広場に響き渡った。考えから現実に戻り、顔を上げると、人垣の左端のあたりからぬうつと進み出るシルエットがあつた。

でけえ。身長百九十はあるんじゃないやねえか？背中に吊っている両手

用戦斧が軽そうに見えるレベル。

噴水の傍まで進み出た彼は、四十数人のプレイヤーに軽く頭を下げると、猛烈な身長差のあるキバオウに向き直った。

「オレの名前はエギルだ。キバオウさん、あなたの言いたいことはつまり、元ベータテスターが面倒を見なかったからビギナーがたくさん死んだ、その責任を取って謝罪・賠償しろ、ということだな？」

「そ……そうや。あいつらが見捨てへんかったら、死なずに済んだ二千人や！しかもただの二千ちゃうで、ほとんど全部が、他のMMOじゃトップ張ってたベテランやつたんやぞ！アホテスター連中が、ちゃんと情報やらアイテムやら金やら分け合おうとつたら、今頃ここにはこの十倍の人数が……ちやう、今頃は二層やら三層まで突破できとつたに違いないんや!!」

「あなたはそう言うが、キバオウさん。金やアイテムはともかく、情報はあつたと思うぞ」

俺が黙って聞いていると、再びエギルという斧戦士が見事なバリトンで応じた。はち切れんばかりの筋肉を覆うレザーアーマーの腰につけた大型ポーチから、羊皮紙を綴じた簡易な本アイテムを取り出す。

表紙には、丸い耳と左右三本ずつのヒゲを凶案化した《鼠マーク》。「このガイドブック、あんただって貰っただろう。ホルンカやメダイの道具屋で無料配布してるんだからな」

「……は？む、無料配布？」

俺はエギルのその言葉を聞いて、小さな声を漏らす。

あれは、表紙のマークが示すとおり、情報屋・鼠のアルゴが販売している《エリア別攻略本》だ。

詳細な地形から出現モンスター、ドロップアイテム、クエスト解説まで網羅されていて、表紙下部にでかかど書いてある「大丈夫。アルゴの攻略本だよ。」という惹句もあながち大袈裟ではない。

俺もベータ時代の記憶を掘り起こすために購入済みだが、確かあれは一冊五百コルという値段だったはず……。

「……わたしも貰った」

俺の隣で、今までひっそり沈黙を守っていた女性プレイヤーが、そう囁いた。

「……タダで、か？」

俺が彼女にそう尋ねると、彼女はこくりと頷く。

「道具屋さんに委託してたけど、値段が0コルだったから、みんな貰ってたわ。すごく役に立った」

「ば、馬鹿な……。一体どうなってんだ……。？」

あの《鼠》が、情報を無料配布、だと？

ありえねえだろ！金さえ積みめば自分のステータスすら売りかねない商売の鬼のあの《鼠》だぞ！？」

そう思い視線を振るが、数分前までアルゴが座っていたはずの石堀はすでにカラになっていた。

次会うときには理由を聞いてみたいと思うが、それでまた金を要求してくるのは目に見えている。

「——貰たで。それが何や」

「このガイドは、オレが新しい村や町に着くと、必ず道具屋に置いてあった。あんたもそうだったろ。情報が早すぎる、とは思わなかったのかい」

「せやから、早かったら何やつちゆうんや！」

「こいつに載ってるモンスターやマップのデータを情報屋に提供したのは、元ベータテスターたち以外には有り得ないってことだ」

プレイヤーたちが、一斉にざわめいた。キバオウがぐつと口を閉じ、その背後で騎士ディアベルがなるほどばかりに頷く。

まあ、エギルの言ってることは間違っていない。俺もガイドブックの制作に一枚噛んでるし。

……でも、タダとは聞いてねえぞ鼠……。俺手伝ったのに有料だったんですけど……。

エギルは視線を集団に向けると、よく通るバリトンを張り上げた。「いいか、情報はあったんだ。なのに、たくさんのプレイヤーが死んだ。その理由は、彼らがベテランのMMOプレイヤーだったからだとオレは考えている。このSAOを、他のタイトルと同じ物差しで計

り、引くべきポイントを見誤った。だが今は、その責任を追求して
場合じやないだろ。オレたち自身がそうなるかどうか、それがこの会
議で左右されると、オレは思っているんだがな」

エギルの言っていることは間違っていない。むしろ割と的を射て
いる。

確かに、死んだ二千人の内、約三百人はベータテスターであり、残
りがビギナーだ。

この三百人という数字は鼠の推計なので、現実ではない。

しかし、このデータが合っているとするとするなら、実はベータテスター
の死亡率は四十パーセント近くまでなる。

その理由はさっきエギルが言っていたことと一致するところもあ
るだろう。

なにより、知っているからこそ、油断を生んでしまったのだ。

「キバオウさん、君の言うことも理解はできるよ。オレだって右も左
も解らないフィールドを、何度も死にそうになりながらここまで辿り
着いたわけだからさ。でも、そのエギルさんの言うとおり、今は前
を見るべき時だろ？元ベータテスターだって……いや、元テスターだ
からこそ、その戦力はボス攻略のために必要なものなんだ。彼らを排
除して、結果攻略が失敗したら、何の意味もないじゃないか」

ディアベルのこの言葉を聞いて、深く頷いている者が聴衆の中に何
人もいる。

元テスター断罪するべし、という雰囲気だったこの場が、エギルと
ディアベルによって変わっていく。

「みんな、それぞれに思うところはあるだろうけど、今だけはこの第一
層を突破するために力を合わせて欲しい。どうしても元テスターと
は一緒に戦えない、って人は、残念だけど抜けてくれて構わないよ。
ボス戦では、チームワークが何より大事だからさ」

ぐるりと一同を見渡したディアベルは、最後にキバオウを真顔で
じっと見詰めた。

キバオウはしばらくその視線を受け止めていたが、ふんと盛大に鼻
を鳴らすと押し殺すような声で言った。

「……………ええわ、ここはあんさんに従うといたる。でもな、ボス戦が終わったたら、キツチリ白黒つけさしてもらおうで」

キバオウはそう言って振り向き、スケイルメールをじゃらじゃら鳴らしながら集団の前列まで引っ込む。

エギルもまた、それ以上言うことはないというように両手を広げると、元居た場所へと下がった。

……………これはもう、俺の出番はないな。少なくとも、今は。

だが、これで完璧に溝がなくなったのかといえば、決してそうではない。

これは先延ばしに過ぎない。必ず、どこかで衝突する時が来る。

そこでどうやって俺だけにヘイトを向けさせて問題を解消するか。考える必要があるな。

会議は最終的に、ディアベルのこの上なく前向きなかけ声と、それに応じる参加者の盛大な雄叫びで締めくくられた。

だが、俺と隣の彼女は叫ぶことはもちろんだが、片手をケープの下から出そうとすらしなかった。

いやだつて、こんなにア充みたいなのりなれてないし……。団体行動とか苦手だし……。なんならボツチだし……。

「じゃあ、解散でー」

ディアベルがそう言う一人、また一人とこの場から去っていく。

……………さて、俺も帰るとしますか。もう夕方だし、攻略は明日にすればいい。

そう思い帰ろうと立ち上がって帰ろうとすると、ケープを後ろから引かれた。

「……………待って」

「……………何だよ」

俺のケープを引っ張っていたのは隣にいた女性プレイヤーだった。

……………え？何？もう会議終わったよね？

「会議が始まる前に、聞きたいことがあるって言ったでしょ」

「……あー……」

言っていましたね、確かに。

……っというか聞きたいことって何？全然予想つかないんですけど。

「……まさか、忘れてたわけじゃないでしょうね……？」

「……」

ここは無言をとおす。なぜならピンポイントで忘れていたからだ。仕方ないだろ。攻略会議で色々考えることがあったんだから。

「はあ……。まあ、いいわ。それで、いつこの世界での戦い方を教えてくれるの？」

「……ああ。聞きたいことってそれか……。俺は別に、いつでもいいぞ」

明日は攻略を進めるつもりだったし、それと同時に彼女に教えれば早い。

だから明日のいつから始めるか、だな。

「そう？なら早速行きましょう」

「……え？今からか？」

「当たり前でしょ？」

……まさか今からとは。

夕方だし、流石に明日だろうと思ったんだが……。

「どうしたの？早く行くわよ」

自分から教えるといった手前、断りづらいし、何より早くやることにデメリットは少ない。

それに、今日教えておけば、明日の攻略がスムーズに進むだろうし……。

ここまで考えた俺は、はあ……とため息を吐いてから、彼女に向かって口を開いた。

「……分かった。じゃあ、まずパーティーを組まないとな」

「……パーティー？」

「ああ。こつちから申請するから、OKしてくれ」

俺はそう言っつて、視界に表示されている相手のカラー・カーソルに触れるとパーティー参加申請を出した。

彼女がOKを押すと、視界左側に、やや小さい二つ目のHPゲージが出現した。

「お前から見て左側を見てみる。顔は動かすなよ。ゲージも動いちまうからな。眼だけ左に向けろ」

「……何このゲージ？さっきまでなかったのに……」

「俺のHPゲージだ。その下に、俺の名前もある」

「……H、a、c、h、i。【H a c h i】。ハチ……。これが、あなたの名前？」

「そうだ。よろしくな。アスナ。……で、いいのか？」

「……ええ。よろしく」

【A s u n a】。それが、神速の《リニア》を操る、レイピア使いの名前だった。

「それで？まず何から教えてくれるの？」

「慌てんなよ……。まあ、まずはスイッチしてPOTローテするとかからかね。ボス戦で必要になってくるだろうし」

「……スイッチ？ポット……？」

「あー……。歩きながら詳しく説明するし、その後実践で試せばいい。習うより慣れろとも言おうしな。まずはおぼろげでもいいから、やり方を頭に入れること。それから実践を重ねて慣れていくんだ」

「……分かったわ」

そうして俺はアスナと共に、会議が行われたツールバーナの噴水広場から、スイッチのことについて説明しながら第一層迷宮区に向かって歩き出した。

第六話 訓練と酒場での対話

あの後、第一層迷宮区に着いた俺とアスナは、ボス戦に向けて必要な技術や戦い方を実践していた。

最初はどうなることかと思っていたが、アスナの飲み込みが思っ以上に早い。これならすぐに、ちゃんと戦えるようになるだろう。

……でも、流石に上達早すぎじゃね？俺はできるようになるまでもっとかかったぞ……。

「……………」

「……………」うん？ああ。いいと思うぞ。普通に戦えてる」

「……………」そう。ある程度は理解できたわ。じゃあ、次は……………」

「待て待て待て。流石に帰るぞ。もう遅いだろ」

まだ戦おうとするアスナに、俺はそう言って止めた。時間的にも、もう日が沈んで暗くなっていることだろう。

アスナが今まで寝ずに戦っていたのは知っているが、それは褒められたものではない。

……………」なにより、俺が帰りたい。飯食って風呂入って寝たい。

「……………」なら、あなただけ帰ればいいわ。私はまだいる」

「いや、パーティーメンバーを置いて帰れるわけないだろ…………」。いいから戻るぞ。次の戦いに備えることも大事だ。それに、飯が美味しいところに連れてってやる」

俺のその言葉に、アスナの体がピクリと震えた。どうやら、腹が減っている感覚はあるようだ。

少しの間、この場が静寂に包まれる。すると、アスナが先に口を開いた。

「……………」分かったわ」

「……………」決まりだな。ほら、町に戻るぞ」

「……………」分かったって言ってるでしょ」

俺は持っていた曲刀を鞘に納め、アスナと共に第一層迷宮区からトールバーナの町へと戻っていった。

トールバーナに着いた俺とアスナは、俺が好きな酒場に来ていた。酒場と言っても、人はそこまで多くない。この酒場は路地裏にあり、見つけづらい場所にあるのだ。

そんなところにあるこの酒場だが、他の酒場と比べても飯が美味しい。……値段が相場より少し高いのがネックだが。

それに穴場ということもあり、ビギナーはほとんど知らない。ベータテスターであっても、知っている者は少ないだろう。こんなところ、穴場を探そうと思わなければ見つけられない。まさに俺にピッタリな酒場と言える。

「……こんな酒場あるのね。もっと人がいる酒場しか見たことがなかったわ」

「……ま、そうだろうな。ここは穴場だからよ。人が少ないんだ」

「……こんなところ、よく見つけたわね」

「まあな。得意分野なんだよ」

「得意分野……？意味がわからないわ……」

アスナはそう言っただけ息を吐いた。

これが得意分野でなにが悪いのか。昔から、一人になれる場所を探すのは得意だったんだぞ。

「……取り敢えず、頼めよ。味は保証する」

「……じゃあ、遠慮なく」

そう言ったアスナは、メニューを見て何を頼むか悩んでいる。

俺はメニューを見ない。頼むものが決まっているからだ。

「……あなたはメニューを見なくていいの？」

「ああ。もう決まってるからな」

「そうなの……？……なら、私も同じで」

「分かった」

アスナの答えを聞いた俺は、NPCに注文する。すると、アスナが俺に話しかけてきた。

「……ねえ、あなたは、ここに来る前も他のエ……、MMOゲーム？っていうの、やってたの？」

「……あ？そりやまあ……」

「他のゲームでも、ご飯とかってこんな感じなの？」

「……いや、他のゲームじゃこうはいかねえよ。フルダイブ型じゃなければ、食べたりなんてできねえからな」

「……ああ。なるほど……」

アスナは俺の説明に納得し、それ以上聞いてくることはなかった。少しすると、頼んだ料理が届いた。

「……いただきます」

俺とアスナはそう言ってから、届いた料理を食べ始める。

……うむ。やはり美味しい。

「……おいしい……！」

「だろ？」

アスナが本当に美味しそうにそう言うので、俺は少し自慢げにそう言った。

そこからは、俺もアスナも無言で一心不乱にその料理を食べた。

「……ごちそうさまでした」

俺とアスナはほとんど同時に食べ終わってそう言った。

本当に満足な食事だった。アスナも美味しく感じたようだし、ここに連れてきてよかったと思う。

「……さて、帰るか」

「……そうね。じゃあ、また明日会いましょう」

「おう。じゃあな。ああ……早く帰って風呂入りてえ……」

俺がそう呟くと、別れて帰ろうとしていたアスナが素早く動いて俺の肩を掴んだ。その速さはまさに《リニア》並の神速だった。次いで、アスナの声が迫力たっぷりに響く。

「……………なんですって？」